

2016年/北東アジア平和と友好の旅

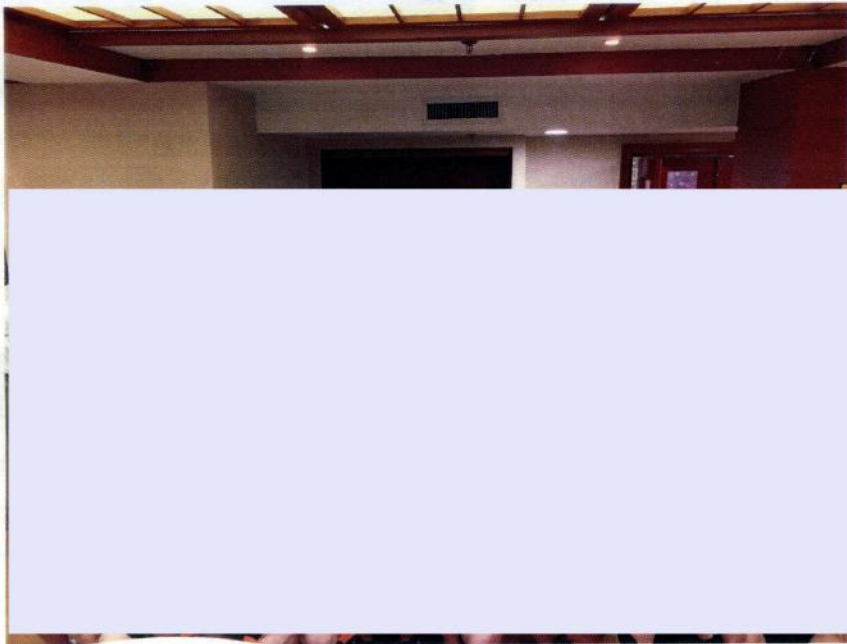
北東アジアの平和のために過去を学び未来を考える

中・朝・露 国境地帯を行く

～ 延吉・図們・琿春・龍井・長白山(白頭山) ～

旅行期間 8月2日(火)～6日(土) 5日間

旅行感想文集



8/5 延辺大学日本語学科学生との交流夕食会

企画・実施

日本中国友好協会大阪府連合会

日本コリア協会・大阪

大阪私学退職者の会

協力

JU 観光旅行友の会

副島 昭一さん

この企画には昨年に引きつづき2回目の参加でした。

延吉は30数年ぶりの再訪でした。前回は改革開放政策が緒についたばかりの時期でしたので、現在の街の様子は当時とは大きく変わっていました。ただ、漢字とハングル併記の看板というこの地域の特徴は当時から変化はなさそうです。長白山麓への道も当時まだ未舗装で、晴れたら土ぼこり、雨が降ったらあちこちにぬかるみと轍の跡ができるという道路でした。山道も当然未整備で定時の登山用の車はありませんでした。特別に用意してもらった車が日本製のランドクルーザー、中国人の運転手もこの車だから安心して登れると誇らしげに語っていたのが印象的でした。そうやって登った頂上もあいにくすっかりガスに覆われ、天池の水面はまったく見ることができず、心残りながら下山しました。たぶん、再びここに来ることはあるまいと思いつつながら。

今回思いがけなくも再訪する機会を得、今度こそ天池をみたいと願っていました。そして、いろいろありながらもともかく天池にたどり着きました。でも絵や写真でいろいろ想像をふくらませていただけに、現実の天池は思い描いていた天池との落差が大きく、むしろ自然破壊の印象が強く残ってしまいました。この地方では短い猛暑の季節のただ中で、かつ入山制限するほどの人出だったことも、この気分を増幅させたようです。

*

*

かつて私は仕事の上で、朝鮮や中国における日本の領事館警察について調べたことがあります。19世紀末から20世紀にかけて日本は不平等条約に基づく領事館裁判権(治外法権)を根拠に領事館に警察署を付設しました。この領事館警察は列強諸国の中で日本だけが設置しており、中国はこれに対して条約上の根拠がないとして撤去を求めていました。満洲事変の直前の1931年8月

時点でその警察官数は中国全体で 885 名、その内東北が 547 名で 62 パーセントを占めていました。さらにその 78 パーセントの 427 名が間島地域でした。韓国併合後、この地域は朝鮮独立運動の後背地となりましたが、日本は「日本人の保護取り締まり」のため、すなわち朝鮮人の運動を鎮圧するために間島地域に多くの領事館警察を置いていました。この間島を統括したのが龍井にあった間島総領事館でその管下に局子街、頭道溝、琿春、百草溝、図們の各分館がありました。

これらのことは以前調べたことでしたが、これらの現場を訪れることができるのが、今回このツアーに参加した一つの理由でした。龍井の日本領事館跡は当初の予定では外観を見るだけになっていましたが、建物の中に入れたのは幸いでした。日本の関東支配の司令部であった間島総領事館は、最近まで龍井市人民政府が置かれていたそうです。古い支配者の拠点が新しく取って代わった支配者の拠点として利用される、これは歴史上よくあることですが。今は歴史展覧館となっており、内部の展示はかなり充実していると感じました。惜しむらくは時間が足りなくて地下の拷問室に回ることができなかったことです。間島パルチザンの人々を拷問した数々の証拠品が残されていたのではないかと思います。

この建物は普段は閉じられていて連絡があれば開けてくれるようですが、普段はそれほど多くの人がここを訪れている形跡が見られませんでした。歴史教育にもどれだけ活用されているか疑問です。

参加メンバーの中には尹東柱の生家や関連の施設、あるいはその他の場所の訪問に最も期待されていた方がいらっしゃると思いますが、私にとってはこの間島総領事館跡がそれにあたります。たぶん私一人だったのではないかと想像します。いや自分もそうだったという方がいらっしゃったらごめんなさい。

ほとんど変化のない風景——緑の山々と時折現れる村々の屋根を車窓から眺めながら、ここが間島パルチザンが活動し、日本の官憲と決死の抗日闘争をくり広げた舞台だったのだと想起していました。

また局子街、頭道溝、百草溝などの地名も路上の標識で見つけ、史料上の地名が現存していることを確認できました。また防川の三国の国境や張鼓峰事件の現場なども見て気づいたこと、考えたこと、冷麺の思い出など多々ありますが、長くなりそうなのでこら辺で筆を擱っておきます。